

誕生石指輪、初登場―大正二年に三越から

大正二年には三越呉服店が、「十二ヶ月指輪」の名称で誕生石指輪を発売した(図1-2-9)。アメリカで誕生石が決められたのはその前年の1912年であるから、ほぼ同時期に誕生石という宝石の新たな捉え方が日本に導入されたことになる(コラム1-3)。

アメリカで決められた誕生石は、1月―ガーネット、2月―アメシスト、3月―ブラッドストーン又はアクアマリン、4月―ダイヤモンド、5月―エメラルド、6月―真珠又はムーンストーン、7月―ルビー、8月―サードオニックス(紅縞瑪瑙)又はクリソライト(おそらくペリドット)、9月―サファイア、10月―オパール又はトルマリン、11月―トパーズ、12月―トルコ石又はラピスラズリ。

日本の誕生石は広告によると、1月―柘榴石(ガーネット)、2月―紫水晶(アメシスト)、3月―ブラッドストーン、4月―※ダイヤモンド、5月―※エメラルド、6月―瑪瑙(めのう)、7月―※ルビー、8月―ムーンストーン(ムーンストーン)、9月―※サハイヤ(サファイア)、10月―オパール、11月―トッパス(トパーズ)、12月―※土耳其石(トルコ石)となっている。

いずれも18金製で一個5円50銭と金の石入り指輪にしては値段も比較的到手頃。値段を抑えているため、ダイヤやエメラルド、ルビーなどの価格の高い宝石には※印が付けられ、これらは「何れもイミテーション」と表示されている。アメリカに倣ったというならば本来は6月の誕生石は真珠又はムーンストーンだが、なぜか真珠―横造真珠もあつたはずだが―は誕生石から除かれ、かわりに瑪瑙(めのう)となっている。また、6月のムーンストーンはサードオニッ

クス(紅縞瑪瑙)やペリドット(橄欖石^{かんらんせき})の代わりに8月の誕生石となっている。12月のラピスラズリも見えない。

このように天然宝石と合成石、模造石が混在し、本来のアメリカの誕生石とはだいぶ異なる誕生石だが、一般への宝石普及(宝石の大衆化)に果たした役割は極めて大きかった。これ以降、三越に倣い他の貴金属宝飾店も誕生石指輪を取り扱うようになった。大正後期から昭和初期には天然宝石のみを使った誕生石指輪や合成石の誕

生石指輪も売り出された。

なお、御木本真珠店は天然の誕生石を扱ったのが早かったようで、同店の大正五年12月の『真珠』No.22で、6月の誕生石は真珠または月長石（ムーンストーン）であり、8月の誕生石は紅縞瑪瑙（サードオニックス）または橄欖石であるとし、裸石（ルース）をカラーで紹介している（ただし、12月はめのう、トルコ石となっており、ラピスラズリは見えない）。



図1-2-9
三越呉服店「十二月指輪」広告
大正2年5月『女学世界』より
右上から1月－柘榴石、2月－紫水晶、
3月－ブラッドストーン、4月－※ダイヤ、
5月－※エメラルド、6月－瑪瑙、
7月－※ルビー、8月－ムーンストーン、
9月－※サファイア、10月－オパール、
11月－トパーズ、12月－※土耳其石（トルコ石）。

(コラム1-3)

誕生石の由来と変遷

誕生石の由来については諸説あつて定かではないが、起源は古く、新約、旧約聖書までさかのぼる。

旧約の場合は、「出エジプト記」にユダヤ教の祭司は胸に12個の宝石を嵌めた胸板を掛けると書かれているが、これが起源だと言う。新約の場合は「ヨハネの黙示録」に書かれた「新しいイエルサレムの12の門の12の石垣の基礎の石」、いわゆるファンデーション・ストーンが起源だという(『すぐわかるヨーロッパの宝飾芸術』⑨)。

このような伝説が基となり誕生石の風習が生まれた。実際に誕生石が使用されたのは18世紀頃のポーランドで、ここに移住したユダヤ人が最初に用いたと言われる(ドイツが早いとの説もある)(『寶石學』⑩、『宝石―神秘と伝説』⑪)。

それを商業的にまとめたものが1912年8月アメリカの業者の組合大会の席上で「誕生石」として統一された。

これが40年後の1952年8月には一部改訂され、6月にアレキサンドライトを追加、8月のクリソライトをペリドッ

トに変え、12月のラピスラズリに代えてジルコンとした。アレキサンドライトやペリドット、ジルコンは当時のヨーロッパで流行していたので、このように改訂したものと思われる。なお、久米武夫『寶石學』によると、1912年の誕生石統一の時には、天然宝石のみならず合成石の誕生石としてやはり12種が定められたようだ。

1月―アレキサンドライト、2月―バイオレット・サファイア、3月―ブルースピネル又はアクアマリン、4月―ホワイト・ジルコン、5月―エメラダ、6月―セイロン・サファイア、7月―ルビー、8月―エリナイト、9月―サファイア、10月―ロージルコン又はピンクサファイア、11月―ゴールデン・サファイア、12月―ジルコン。

これらの合成石は、日本でも、大正後期から昭和初期に「新誕生石」や「ポップ誕生石」として広く普及することとなる。

誕生石（天然）は国によっても多少の違いがあった。日本でも昭和三十三年（1958）に、宝石組合（全国宝石卸商協同組合）が3月にさんご、5月にひすい（ジェイダイト）を加えて一般に普及した（『全国宝石』40年の軌跡⑫）。

また令和三年（2021）12月に、同組合は63年ぶりに誕生石を改訂し、新たに日本独自のクリソベル・キャッツ・アイ（2月）、アイオライト（3月）、モルガナイト（4月）、スフェーン（7月）、クンツァイト（9月）の5石を含む計10石の宝石を追加した。

合成ルビー、合成サファイア続々輸入

合成石は誕生石指輪にも用いられたが、それ以外のさまざまな洋風装身具や帯留などの和装の装身具にも盛んに用いられた。

日本でベルヌイ法による合成ルビーが用いられたのは明治後期の明治三十七年（1904）頃から（『日本の宝飾文化史』9A-9）。大正時代になると合成ルビーの他、合成サファイアも輸入され、盛んに用いられた。合成サファイアができたのは合成ルビーより遅く明治四十三年（1909）年頃。当初は美しい青色のものが少なかったが徐々に改良された。

これらが、どのくらいの量が使われていたかの記録はないが、大正五年（1916）に出版された鈴木敏編『寶石誌』⑬――に、貴金属宝石商の店頭陳列してある色石（ルビー、サファイア）の「十



図 1-2-10
合成ルビーの束髪簪
金、真珠

中の七、八は天然石に非ず」、しかも、「比較的高価に販売せるを目撃せり、危険至極と云うべし」と注意を促している。

それにしても7／8割が天然宝石ではなく合成石だというのは驚かされたが、それが当時の実状だったのだろう。

当時、天然のルビー、サファイアの入荷が少なかった上、合成石は成分、色、硬さ（硬度）とも天然石と変わらないため、業界では「宝石」として取り扱われていた。

合成石はカラフルでバラエティに富んでいること、大きさや形状が多種多様であること、そして何よりも価格が天然宝石に比較して格段に低廉であるなどの特徴があるため、たちまちのうちに身近な宝石として広く普及した。そして「その普及がまた天然宝石に対する一般の感心を深め、かつ高める誘因となったことも疑いない」と評されている（『宝石百年』（第二部）⑭）。

特に合成ルビーは、若い女性に大変人気があった。あの真っ赤な石にどれだけの女性が魅了されたことか。

当時は良質のルビーが少なかったこともあり、多くの店で合成ルビーの金の指輪や束髪簪が売られていた（図1-2-10）。

昭和初期も事情は同じである。そのため、現在に伝わる戦前のルビーの指輪と称されるもののほとんどは合成ルビーである。

合成サファイアは、合成石としてではなく天然宝石と見誤ってダイヤモンドと合わせて用いられることもあった。そのため指輪など加工されてしまうと、その真偽の鑑定は容易でなく、なかなか見破ることはできなかった（『宝石百年』（第二部））。

(コラム—※JC誌連載後追加)

『宝石百年』—貴重な業界記録

ここで参考文献として『宝石百年』は、これからもしばしば引用するので説明しておく。

この本は業界史研究ではもつとも知られた図書で、副題に「貴金属宝石業界沿革史」とあるように、明治期以降の貴金属宝石業界の成り立ちから戦後の昭和三十年代までに業界で起きた重要出来事をほぼカバーしている。

第一部—座談会、第二部—宝飾品業界百年の歩み、から成る。第一部は業界第一線にいた業界人による四回の座談会記録。第二部は業界動向に詳しい編者が対談の整理を兼ねて日本の宝飾業界史をまとめている。

第一部の座談会編は読みにくいところや多少ピントがずれたやりとりもあるが、当時の業界のありようが伝わる貴重な記録となっている。



『宝石百年』の表紙

P11～22 までが第一部、
P259～387 が第二部。
その他、参考文献(参考資料)など。

金の結婚指輪も普及し始める

日本で結婚指輪が用いられたのは明治三十五年(1902)頃で、小売店から売り出されたのは明治三十七年(1904)である(『日本の宝飾文化史』8A-10、図9-16)。

当時はまだ一部の人へのみ受け入れられた風習だったが、大正期になると、中流以上の人々を中心に、より多くの人々が結婚にあたって結婚指輪を用いるようになった(図1-2-11)。



図 1-2-11
大正 8 年 9 月『家庭雑誌』表紙
結婚指輪らしき金指輪をした婦人。

そのことを示すのが大正二年、前項の三越の「12ヶ月指輪」と同時期に『女学世界』に出た甲丸かまぼこ（当時は蒲鉾形と呼ばれた）の金製結婚指輪広告である（図 1-2-12）。

広告文中に「最近流行の結婚リング」とある。広告を出しているのは『女学世界』発売元の博文館代理部の通販会社。こういった会社を取り扱っているところを見ると、当然、東京の他の宝飾専門店でも扱っていたと考えていいだろう。

The advertisement is for a 'Shinichu Gold Ring' (正十八金製指環). It features a central illustration of a simple gold ring. The text is arranged in columns. At the top, it says '最近流行の結婚リング' (Recently popular wedding ring). Below that, it describes the ring as being made of 18K gold and suitable for both men and women. It lists prices: '正十金製 特價六圓二十錢' (18K gold, special price 600 yen), '正二十金製 特價七圓二十錢' (22K gold, special price 700 yen), and '文字彫刻料壹字に付金拾貳錢' (Engraving fee 100 yen per character, plus 120 yen for gold). It also mentions '留送料内地十二錢' (Shipping fee 120 yen for domestic orders).

図 1-2-12
正十八金製指環広告
博文館代理部博通社
大正 2 年 5 月『女学世界』より
「結婚リング」という呼び方もされている。

関西方面で結婚指輪に積極的に取り組んだのは尚美堂。尚美堂は明治三十三年に江藤栄吉郎によって淀屋橋に創業された貴金属宝飾

店で、創業当時から時計だけでなく、貴金属や装身具、美術工芸品などを取り扱った宝飾専門店『JEWELS』^⑮。早くも大正元年にはダイヤモンド専門の小冊子を発行するなどして大正時代の貴金属宝飾界のリーダー的宝飾店として名を馳せた。

この尚美堂が大正二年に出した商品カタログには金製の結婚指輪が紹介されていて、男性が女性に贈るだけでなく、西洋式に「必ず相互に交換」することを勧めている(図1-2-13)。



図1-2-13
金製結婚紀念御指環
尚美堂
大正2年1月『尚美堂新品録』より

立爪(ティファニーセッティング)と「ねじ梅」

ティファニーセッティングによる立爪が大正の初めにすでに販売されていたという^{たてづめ}と、ちよつと早すぎるのではという疑問を投げかける人も少なくない。

だが実際には小売店で売られていた。その時期は『わが組合史』^⑯の「商品の変遷」によると大正五年で服部時計店が最初だと、これまでではされてきた。しかし、もう少し早い時期に、大阪の尚美堂が扱っていたようだ。

それを示すのが、大正二〜四年の大阪の尚美堂発行の通販カタログ『尚美堂時報』。この時期の表紙は連続して立爪の絵が揚げられている(図1-2-14)。大形ダイヤモンドの輝きを最も引き立たせる

のはこの立爪であると知つての導入だったのだろう。
当初、立爪は単に「爪留」と表記されることが多く、業者間では「カニの目玉」と呼ばれていた（「鏝のあゆみ」(5)(17)）。立爪という呼称が一般化したのは昭和初期になつてからである（昭和二年9月、さのや宝飾店（東京・浅草）広告）。

なおティファニーセッティングは1886年、ティファニー宝飾店（アメリカ）の創始者チャールズ・ティファニーが開発したダイヤモンドの留め方。6本の爪でダイヤモンドを高く持ち上げて留めることによりダイヤモンドの輝きが一層高まる。



図 1-2-14

立爪指輪

尚美堂

大正2年10月『尚美堂時報』より

立爪の発売とほぼ同じ時期に、「ねじ梅」と呼ばれる日本オリジナル指輪も登場した（図1-2-15）。立爪は明らかにティファニーセッティングの模倣だが、当時の宝飾店や鏝職（貴金属加工技術者）は外国の真似ばかりしていたわけではなく、このような独創的な指輪も開発していた。

「ねじ梅」は「捻り梅留め」を略した言い方で、梅模様の石座にダイヤモンドをセットする爪留めによる石留方法である。

このような石留指輪の見事さは「当時外国の嘆称するものがあつた」（『宝石百年』（第二部））。

図1-2-16はその実物で、腕は18金製、石座はプラチナ製のねじ梅指輪。確かに現在の私たちが見ても美しく、戦前までの日本を代表する指輪といってもいいだろう。

なお、「ねじ梅」はダイヤだけでなく他の宝石にも応用され、大正後期から昭和初期と長く流行した。また「ねじ梅」のヒットが参考



図 1-2-16
ねじ梅指輪（実物）

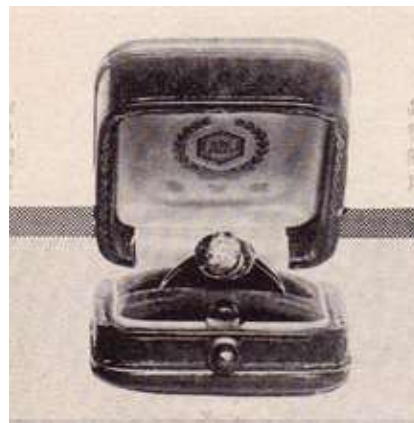


図 1-2-15
ねじ梅指輪
尚美堂
大正 3 年 11 月 『尚美堂時報』
より

になったのだろうか、「菊形」や「桔梗形」^{ききよう}「撫子形」^{なでしこ}「桜形」など、花モチーフの 18 金製花形爪指輪も数多く作られた（図 1-2-17）。これらいずれも一点一点、爪の部分をやスリで削り出して作った品々で、そのレベルは高く現代でも簡単には再現できない。量産用の精密鑄造法（キャスト法）が広く用いられるようになるのは、ずっと後の昭和四十年代になってからである。



図 1-2-17
花モチーフの指輪
右上から菊形、桔梗形、撫子形、桜形
大正 2 年頃、三越呉服店『指輪時計埴物目録』
(みつこしタイムス第 11 巻第 9 号付録—臨時増刊) より

(コラム 1-4)

「指環」と「指輪」

指輪は英語のフィンガーリング (finger-ring) の日本語訳。この訳には 2 つの表記があった。図 1-2-9 の広告では現在と同じく「指輪」と書かれ、図 1-2-12 や図 1-2-13 の広告では「指環」と書かれている。

「輪」も「環」も円い形を意味するが、指輪に用いる場合は「環」の方が古く、明治期の広告や小説『金色夜叉』などでの表現を見ると「指環」の方が、かなり多い。

大正時代になると「指輪」表記が増えた。しかし、ここで見たように、まだまだ「指環」を使うことも多く、この傾向は昭和十二年頃まで続いた。

一方、図 1-2-12 の文中にあるように、西洋式に「リング」という言い方も使われている。これは明治期にはなかった言い方で、意図的に使い分けていたかどうかは定かでないが、表記のしかた一つにも違いが出るところには興味がわく。

ちなみに、『指輪の文化史』^⑮では「指輪」がはじめて用いられたのは、『外来語の語源』(吉沢典男他) によって「大正十三年に用いられはじめている」としている。だがすでに見たように、三越では大正二年には「指輪」を使っているし、古くは明治三十七年の大西白牡丹の広告でも「指輪」が使われている(『日本の宝飾文化史』図 9-17)。これまで言われ

ているより「指輪」の使用は早かったようだ。

なお、その後も「指環」という表記を好む人もいて、現代でも昭和四十年刊の奥村博史の指輪エッセイは『わたくしの指環』となっている。また昭和五十六年に寺尾聰が歌って大ヒットした「ルビーの指環」も「指環」である。